

「考える楽しさを実感し、意欲的に学ぶ子どもの育成」

I 研究の内容

人間がよりよく生きるためには、知識をただ所有するだけではなく、これを積極的に活用することが不可欠である。現代の生活は複雑化し、かつ変化も激しいため、学校で学んだ知識を現実場面にそのまま適用するだけではすまなくなっている。自分の持ち合わせているさまざまな知識をいろいろな組み合わせながら、現実場面の問題に対処することが要求される。現在、思考力が学力を支える重要な要素として位置づけられているのもそのためである。

授業の主役は子どもである。子どもが課題をじっくり考え「わかった」「できた」という喜びを感じ、得た知識や技術が「役に立つ」ことを実感できるような授業を仕組んでいく。「考えること」「高め合うこと」そして「活用すること」の楽しさを味わわせる。これらの視点に立って教材研究を深め、さらにこのことが意欲の向上にもつながっていくことを確認しながら研究してきた。

具体的内容

- ・理論研究 「思考力について」
- ・実態調査 学習に関する意欲調査の実施 個別データの分析
- ・学校諸課題についての学習会の実施
 - 全国一斉学力調査・体力テストについて
 - 新教育課程・外国語教育について
 - 食教育について
- ・授業案の作成・検討及び研究授業（全体） [指導助言者]

2年	音楽科研究授業	古屋 ゆか 教諭	薬袋 貴 指導主事
3年2組	学級指導研究授業	堀井ますみ 教諭	永田恵子 指導主事
		武川 啓子 主任学校栄養職員	
5年	社会科研究授業	武井 文明 教諭	数野保秋 指導主事
- ・一人一実践（低・中・高学年部会内）

II 成果と課題

今回の研究は、各指導者が様々な学習活動の中に思考させる場面を意図的に仕組むことでより、意欲的に考えることを楽しめる子どもにしようというねらいで行ってきた。教科の限定はせず、指導者がやりやすい教科領域で思考場面を自由に設定した授業を行うことで自信をつけ、またそれを見せ合うことで様々な展開例を学び

合うことができた。

どの研究授業も児童の実態把握が十分に行われ子どもたちに何を考えさせたらいいのか吟味，検討されていたので子どもたちの意欲的な活動，生き生きとした学習につながっていたように思われる。

教師の適切な声がけも子どもたちの意欲を高めていた。考えることは個人差も大きいがどこまで考えられたかを見取って評価していくことで，結論に達しなかった子どもにも自信を与えることができる。その子なりの考えを大切にしその後の話し合いや高め合いに生かすようにし，不十分だった考えを完成させ自分のものにできるようにしていくことが大切である。

思考を伴わない学習活動はない。授業の中で子どもたちに何を考えさせるのか決める場合，それに必要な資料が準備できるのか，また必要な体験がされているのか，理解を深めるのに必要な知識があるのか等を十分検討していくこと。

一つの考えに満足せず異なる考え方を探らせたり，友達の考えを聞き自分の考えと比較し共通点や相違点を明らかにし，自分の言葉や文章で表現させること。

思考力は，その背景となっている知識なしには発揮することができない。しかもそれらの知識は構造化されたものになっていなければならない。子どもが問題に直面したとき，過去の経験や学習した知識をもとに，あれやこれやと考えたり，つまずき，考え直したりしていくことにより，知識は次第に構造を持つようになる。自分の出した答えがはたして妥当なのか確かめてみたり，何か見落としがないかを振り返ってみたりするなどして，時間をかけて思考を練り上げる作業が，生きた学力を形成するうえで必要である。子どもに一つの答えを早急に求めるのではなく，考える余裕を与えることで，思考は深められるだけでなく一層ふくらみ多様な発想が展開されるであろう。そうすることで子どもにより豊かな思考力が培われていくと考える。今後もこういったことを意識して授業を仕組み，内容の充実と意欲の向上を図っていきたい。

Ⅲ 成果物

実態調査質問紙	実態調査結果データ
1年	算数科授業案 「どんな計算になるかな」
2年	音楽科授業案 「いい音を見つけてあそぼう」
3年	学級活動指導案 「給食の献立作りにチャレンジしよう！」
4年	総合的な学習 「食事の今と昔」
5年	社会科授業案 「これからの食料生産」
	理科授業案 「おもりのはたらき」
6年	道徳授業案 「日本人としてのほこり」
あおば学級	学級活動指導案 「ぼくの気持ち」
食育実践事例（1～6年）	（研究主任 武井文明）